

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所主任 渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

最近の小学校の教育現場における大きな出来事として、英語が教科化されることが決まったことがあげられます。もう一つ、子ども達の表現力を伸ばす試みが始まっていることが新聞で報道（朝日、平成24年7月8日）されました。それは、日常生活でのコミュニケーションの一つとして、伝えたいことを話して自己表現する「プレゼン力」を育てる取り組みが地域の小中学校で広がりつつあるという内容でした。

教員採用試験では既にこのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力が教員としての重要な資質として評価の対象になっています。本学でも大学教育として様々な授業において実践的な課題をとおして重視している内容です。しかし今後は、英語力と共に、自らの考えを的確にプレゼンするという能力を、初等教育の段階から育成しようという動きが更に広がっていくと言えるでしょう。

これらのことは、大学センター入学試験のあり方が見直されている事実とも深い関連があるように思われます。一回の試験での1点を争う入試ではなく、人間をみる人物中心の入試に変わろうとしている入試改革の背景には、企業の、グローバルに活躍できる人材を採用したいという企業論理があります。ここで、一人一人の学生は自分の考え方を他者に伝えるプレゼンテーション能力が要求されることになります。

このように、今は過去から普遍的で変わらない価値観をベースにしながらも、時代の流れに応じて大きく変わる部分に照準を合わせるものが求められる時代であると言えるでしょう。その方向において、人々の生活をより良くする大きな改革が進んで行くのだと思われます。現在、総合科学研究所の機関研究として、名女大高校の中高一貫教育における教育研究が、生徒の大学受験を念頭に置きつつ真の学力向上に向けて力強く進行しており、大きな成果が期待されています。これは一つの先進的例として紹介しましたが、総合科学研究所は、幼児、児童、生徒、学生、大人までを対象とし、時代の流れに適応した事業や研究を推進するという意味において大きな意義があると考えています。

平成25年度 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」報告

〈地域貢献(H25年度)〉家政学部食物栄養学科：片山直美、文学部児童教育学科：渋谷 寿代・宇野民幸・眞崎雅子・堀 祥子・村田あゆみ・吉田 文、短期大学部保育学科：平井孔仁子・大嶽さと子・河合玲子・幸 順子、短期大学部生活学科：石毛恵美枝・榎本雅穂・北川剛一・成田公子・松本貴志子・森屋裕治・武岡さおり・阪野朋子、名古屋女子大学同窓会「春光会」：小原玲子・大橋益子・構実千代・熊崎稔子・鈴木美保子・田中和子・中川美紀・早川千鶴子・宮川富美子・吉田嘉子

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」として地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所の両公共施設とのコラボレーション事業は、25年度を無事終えることができました。昨年同様、学内公募で本地域貢献事業への参画を先生方へお願いし、応募していただいた数は今までの最高となり、参加者もリピーターの方が多くなりました。瑞穂児童館との交流事業は、平成25年10月から平成26年3月までに、児童館祭りのイベントを含めて、保育・教育、栄養・生活関係の7つの講座と児童館クリスマスイベントで8つの企画を行いました。例年と同じくらいの参加者となり、今年度はお父さんの参加も多く見られました。瑞穂保健所との交流事業は、「若返り教室キラキラコース（平成25年度認知症・うつ予防教室）」を支援する形で、5つの企画を行いました。これらは春光会、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所教職員が協力して実施し、お年寄りの方々に元気をいただきました。来年度も、地域の方たちと触れ合う機会を持って、学生が成長することを期待します。（文責：原田妙子）

①名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成25年9月～平成26年2月

平成25年度認知症・うつ予防教室

【若がり教室キラキラコース】(汐路学舎で実施)

「染色ハンカチ制作体験」、「薬膳料理に挑戦!」「おいしく食べて健康に!」、「童謡や唱歌を歌いましょう」、「簡単料理でおいしく元気!」、「作ってみよう! 香りのよいヒノキを使って」

②名古屋市瑞穂児童館との交流事業

①クリスマスイベント「第5回クリスマスを皆でたのしもう!」

平成25年12月7日(土)・8日(日)

イルミネーション、「オーナメントクッキーをつくらう!」講座、各種イベント「さんすうホール」「クリスマスのおはなし」「ピニャタってなあに～クリスマス絵本の世界とオーナメントづくり」「カラダであそぼう! レッツダンス!」「ペーパークラフトをつくらう!」他

②交流事業の各種講座 平成25年10月～平成26年3月

「親のメンタルヘルスについて考える」「食育相談」「楽しくおいしくみんなでピZZア」「パソコンでクリスマスカードを作ろう!」「子育てグループ教室」「カラフルおとだまをつくらう!」「おこしもの作り」



染色ハンカチ制作体験



童謡や唱歌を歌いましょう



食育相談



楽しくおいしくみんなでピZZア

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～大正から戦前期の女子教育の諸相～

氏原陽子(代)・竹尾利夫・遠山佳治・吉田文

今年度の研究活動は、共同研究1回、個人研究2回の研究会及びインタビューを実施しました。共同研究では、『會誌』（名古屋高等女学校校友会・同窓會）の記事を、学校移転の年（昭和10年度）の学級日誌、学芸会等の演目、教員の紹介、教職に就く卒業生・上級学校に進学する卒業生の視点からそれぞれ発表しました。

個人研究では、遠山佳治教授から、越原和先生の演劇教育について、『春嵐（学園七十年史）』『越原春子伝 もえのぼる』で、どの

ような説明がなされているかを確認されました。その上で、当時和先生に影響を与えた早稲田大学の恩師坪内逍遙や先輩・後輩たちの動向や思想、また社会的背景についての概説、および和先生直筆の演劇脚本および『會誌』の記事を手掛かりにした演劇上演の報告がされました。氏原陽子から、本校の学外活動について『會誌』の記事を手掛かりに報告がされました。（文責：氏原陽子）

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究6」

～『学士力』育成のための教育方法の検討～

大嶽さと子・神崎奈奈・嶋口裕基・白井靖敏・遠山佳治(代)・羽澄直子・原田妙子・幸 順子

本研究は、平成13年度から研究所機関研究として継続している「大学における効果的な授業法の研究」（1 情報教育、2 語学教育、3 教養教育、4 初年次教育、5 評価方法）の一環として位置づけられ、平成24年度～平成26年度の3年間をかけて進められるもので、本学学生を対象とした「学士力」育成のための教育方法を検討しております。

今年度の取り組みの1つとして、11月29日（金）に、愛知県立大学で開催された「東海地区大学教育研究会研究大会」に参加しまし

た。甲南女子大学教授の島田博司教授による基調講演「主体的な学びを仕掛ける授業づくり」の後、シンポジウムでは本学の研究メンバーである原田妙子准教授が報告者として発表しました。「短大での地域貢献演習、PBLの取り組み」というテーマで、「地域貢献演習」の授業での取り組みについて実例を挙げて報告し、教員がいかにして学生の自主性を引き出していけばよいのかなど、参加者との間で活発な議論が展開されました。今後の成果が期待されます。

（文責：大嶽さと子）

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～遊びの中の学びⅡ～

幼児保育研究グループ

「遊びの中の学び」のまとめとしてスタートした今年度も、園生活の後半に入り、個々に活発な遊びへの取り組みが見られます。10月21日に行った公開保育では、抽出児を中心としながら、各クラスの遊びについて研究の観点となる情報を多く用意し、遊びの実態を記録しました。抽出児を中心としながらもクラスでの遊びの実態にも注目し、抽出児の遊びの姿から、一人ひとりの中にある主体性のあり方と学びについて検討しました。

第2回幼児保育研究会では、抽出児の1年間の遊びへの取り組みをはじめとした研究結果や「遊びの中の学び」について、3年間の取り組みならびに成果を検討し、遊びの意味する重要性を再確認できました。

（文責：森岡とき子）



第2回研究会

機関研究

「中高一貫生の学力向上に関する研究」

～思考力を育てる「言語活動」の工夫—大学受験指導と日常の授業との相関性を高める—

中高一貫校学力向上研究グループ

今年度は研究テーマを「思考力を育てる〈言語活動〉の工夫」とし、サブテーマを「大学受験指導と日常の授業との相関性を高める」としました。言語活動という仕掛けを効果的に導入することで、生徒が主体的に思考し、蓄積された知識が生きて働く知識となれば、「女子の中高一貫進学校」という本校の新たな学校像も具現化してきます。これに基づいて、以下のような研究活動を行いました。研究会：第156～158回・研究授業：6/4 八木橋教諭（地歴科）10/16 波多野教諭（数学科）夏期研究合宿：8/5～6 恵那峡グランドホテル（20名参加）・派遣研修：11/22 京都市立堀川高等学校教育研究大会 第31回研究発表会：2/21（金）14:00～15:30 於中高会議室（文責：大西裕人）



研究授業

機関研究

「高校生の学力向上に関する研究」

～思考力を高める授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

高校生の学力向上を目指し、総合科学研究所と連携した研究活動も今年度で7年目を迎えました。私たちが研究に取り組むきっかけは「学力を向上させる」ということから始まっています。そのためには「思考力」を高めていく必要があり、2年前より教科の特性を考慮しながら「思考力を高める授業のあり方」をテーマに掲げて進めてきました。本年度は、外国語と保健体育について全教員参観型の研究授業に取り組みました。

一方、研究会のメンバーは様々な研修・研究会に参加しました。また、12月にはベネッセコーポレーションの大平正先生と佐藤友利亜先生をお招きして講演会を開催。日々の授業を見つめ直す機会を設けました。（文責：野中知里）



研究授業

プロジェクト研究

「教員養成校における創造的思索の構築のための教育カリキュラムの検討」

～芸術・哲学・心理の観点から～

塩見剛一・堀 祥子(代)・命婦恭子

本研究では、教員養成校の学生に対して「思考の言語化」を「自己と他者とのかかわりの中で創造的におこなう」ことで、創造的思索の構築を目的とした教育カリキュラムを検討するために、今年度、研究メンバーのゼミを合同で4回行いました。

実践では、可塑性を持つ素材を用いることで、造形に対する学生の苦手意識を極力取り除いた作業に取り組みながら、教員はファシリテーターという立場で安易に導かないこと、まとめないことを心

がけ、多くを参加学生の語りに委ねて対話しました。これらの活動がグループで行われたという点と、メンバーの多様性を保ちつつ相互にコミュニケーションを取りやすいサイズであったことから、個々の心理的な成長を支援する活動でもあったと考えられます。

今後は改善、分析、考察を加え、最終的にはファシリテーターは置かず、学生が自発的に対話の場を設けることが出来るような教育カリキュラムの検討と提案を行う予定です。(文責：堀 祥子)

プロジェクト研究

「初等英語教育教授法についての研究」

～小学校教員の授業力・教育力を活かす小学校英語活動法～

ダグラス・ジャレル(代)・羽澄直子・服部幹雄

本プロジェクト研究では、小学校の先生たちの知識や経験と英語活動のリンクに焦点を当て、他教科の教授法などを活用した英語活動法や教材の探求を目的としています。

従来の発音指導では、外国語と母語の相違に重点が置かれることが多いのですが、文節音に本来備わっている音のイメージには文化を越えた共通性が見られるはずで、音のイメージを実感させるこの方法は、国語教育との連携も期待でき、英語活動の有用な指導法となります。またリスニング活動を効果的に導入することで、発音

に対する学習者の心理的負担を軽くすることもできます。

児童英語教育学会などの学会では、テキスト『Hi, friends!』の単元に、国語、算数、理科、社会科に関連する活動を取り入れる具体例や、ゲームや歌といった娯楽的要素の強い表層的な活動とは一線を画す、児童の意欲や達成感を引き出す実践例を見聞し、本研究を進めるうえでの知見を深めることができました。

(文責：ダグラス・ジャレル)

プロジェクト研究

「保育者養成の為の表現授業における指導方法の研究」

松田ほなみ(代)・三輪亜希子

保育者に必要な想像力や自発性を養い、表現する力を培うために、指導方法を研究して参りました。学生の発表の場として越原記念館を使用する許可を頂き、1クラス4つのグループに分かれ、合計12グループが発表を行いました。昔ばなしを題材とした創作ダンスの発表です。12グループ全て違うお話です。発表後「皆で意見を出し合って良いモノにする過程が最高だ」という感想や、「みんなで力を入れて教え合い、協力して出来上がった作品だと感じた」という感

想が見られ、協調性も養うことができたことと実感しています。記念館は最新の設備が充実し、学生の表現力をそれ以上に発揮することができました。最初お話を調べるところからはじめ、お話を絵に表現し、絵からダンスを想像し発表まで至った過程において、充実感を得ることができたのだと考えます。このことが将来に役立つことを願いつつ、今までの研究に加え、発表後のアンケート調査を分析し、さらに指導方法を追求していきます。(文責：松田ほなみ)

平成26年度プロジェクト研究

「小学校英語活動における他教科と共有可能な汎用的教授法についての研究」

ダグラス・ジャレル(代)・羽澄直子・服部幹雄

本研究は、平成25年度のプロジェクト研究「初等英語教育教授法についての研究～小学校教員の授業力・教育力を活かす小学校英語活動法」を継続するものです。

平成25年度の研究で検証した英語活動の実践例をみると、他の科目で使う教材を活用したり、普通の授業の延長上に英語活動を据える試みは増えていますが、専門的な英語運用力や知識を前

提とした事例も多く、小学校教員の授業力が十分に反映されない状況は残っているようです。

同じ言語教育である国語科、音声リズムを体得する音楽科や体育科、異文化理解をカバーする社会科などの教授法を分析し、英語活動実践例と照らし合わせ、両者の連携を模索します。

(文責：羽澄直子)

「わらべうたを用いた幼児期の体系的な音楽教育の研究」

伊藤充子・稲木真司(代)・吉田文

音楽的な能力を養うために、子どもたちの幼児期における音楽との関わりは重要な役割を担っています。しかし残念なことに、多くの幼稚園や保育園、また家庭における音楽的活動は、最近の研究によって明らかになってきた子どもの発達段階や音楽指導法に沿っていないことがあります。そのような環境で育った子どもたちが、基礎的な正しい発声法や歌唱法、またリズム感や音感を

培う機会がないまま小学校に入学し、音楽の授業についていけなくなってしまうことは少なくありません。幼小連携の必要性が求められているなか、本研究では、幼児期の基礎的な音楽教育の実践において、わらべうたを用いて体系的に行うという試みに取り組んでいきます。

(文責：稲木真司)

総合科学研究所主催 平成25年度 大学講演会（9月19日）

「学士力を向上させる実社会連携型 PBL ―専門教育と教養教育の視点から―」

講師：金田重郎氏（同志社大学 PBL 推進支援センター副センター長）

平成25年9月19日（木）に開催した総合科学研究所主催の大学講演会は、同志社大学 PBL 推進支援センター副センター長の金田重郎先生にご講演いただきました。

講演に先立ち、機関研究「大学における効果的な授業法の研究 6 ―『学士力』育成のための教育方法の検討」を代表して、白井靖敏教授が「学士力育成のための授業実践に関する調査（平成25年1～3月実施）の結果概要」にて本学の現状報告を行いました。

講演では、「学士力を向上させる実社会連携型 PBL ―専門教育と教養教育の視点から」をテーマとし、同志社大学の専門教育 PBL・教養教育 PBL をもとに、その教育効果や課題について言及されました。前者では京都府・毎日新聞など実社会と連携した災害情報共有システム、後者では全学共通一般教養科目「プロジェクト科目」の「絵本ソムリエ」プロジェクトを紹介され、学生の情緒性向上に効果を発揮していることなどをご指摘くださり、学生たちの自律的な課題解決力を育成する学びのシステムの重要性を感じました。本学にとって実りのある講演会でした。（文責：遠山佳治）



平成25年度 大学講演会

第7回 高等学校教育講演会（12月21日）

「思考力高める授業のあり方」

講師：大平 正 氏（株）ベネッセコーポレーション岡山本社 高校事業部 基盤推進課

名古屋女子大学高等学校の教育講演会では、ベネッセコーポレーションの大平正先生と佐藤友利亜先生をお招きして「思考力を高める授業のあり方」をテーマにご講演いただきました。講演では、各学校で実践されている具体的な取り組み事例の紹介を中心に、思考力を高めるために必要な手立てについて色々な観点から考えました。

時代とともに学び方のスタイルは変遷し、現在では「グループ討議」や「自ら体験する」学びが主流となっています。しかし、生徒の「能動的な学習」は、机の配置を整えただけで成立するものではありません。教員が生徒をリードしていく技術が必要であり、それを持たなければ思うような成果を得られないという難しさもあります。また、生徒の思考力を高める能動的な学習は、我々教員と生徒との日々のコミュニケーションの上に成り立つということを再確認し、思考力を高めるヒントを得るだけでなく、教育の難しさをあらためて実感する機会となりました。（文責：野中知里）



第7回 高等学校教育講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健所との交流事業「若がえり教室キラキラコース」
「懐かしの童謡や唱歌を歌いましょう」

児童教育学科で保育の勉強をしている私にとって、高齢者の方と関わる機会は多くありません。そのため今回のワークショップは新鮮で、とても楽しみにしていました。

古くからある唱歌や童謡、手遊びやわらべ歌を楽しみました。私の知らない歌も多くあり、最近の曲とは違う雰囲気や歌詞の言葉など、この古くからある歌を今の子どもたちにも知ってもらいたいと感じました。懐かしい歌を思い出したことで、参加してくださった方の気持ちが明るくなったら嬉しいです。

児童教育学科 幼児保育学専攻4年 青島可奈

● 瑞穂児童館との交流事業

● 「オーナメントクッキーをつくらう！」

- クリスマスのクッキー作りにボランティアとして参加しました。
- 普段、子どもと触れ合う機会が少ないので、最初は何を話せば良いかが分からず、とても不安でした。しかし、積極的に話すことで子どもたちと打ち解けることができました。心を開いてもらうには、まずは自分が心を開かなければいけないと感じました。子どもたちの思い思いにクッキーを形づくる、楽しそうな姿が印象的でした。私自身もとても楽しめたイベントでしたので、また進んでボランティアに参加したいと思いました。

短期大学部 生活学科1年 鈴木愛菜

今年度運営委員

委員長

原田 妙子
HARADA Taeko
(短期大学部)伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)辻原 命子
TSUJIHARA Nobuko
(家政学部)羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)

研究所メンバー

所長

竹尾 利夫
TAKEO Toshio

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

准教授

越原 もゆる
KOSHIIHARA Moyuru

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

職員

宇野 美保
UNO Miho

編集後記

ここに総合科学研究所だより第18号をお届けいたします。ご執筆下さいました関係者の皆様に感謝申し上げます。この1年間で、地域貢献事業は以前にもまして好評でした。機関研究における、創立者越原春子および女子教育に関する研究、幼稚園から大学までの教育研究、学際的なプロジェクト研究においても大きな成果が出ております。これらの研究所の活動をご理解いただき、今後の事業に是非ご協力をお願いいたします。

文責：渋谷 寿